

食育の根っこにあるもの

～農の体験が“心”を育む～

総合的な学習の時間などを活用して“食育の視点”を取り入れる学校が増えてきた。そんな中で「田植えから収穫まで“米作り”を体験する」学習が全国に広がっている。小学校5年の社会科で学ぶ「日本の農業」を主軸に、稲を栽培するという体験学習を通して、米粒の観察では理科、炊飯して家庭科とリンクさせて行われることが多い。

様々な事例がある中で、学習がうまく展開される共通点は“横の連携”がよく行われているかどうか。米販売店が土作りに協力したり、要所要所で生産農家やJA、行政（産業振興課など）が指導したり、地域のボランティアや保護者が応援にかけつけたり、学校内でも担任の先生を中心に理科や家庭科や栄養士が連携して、学習が膨らんでいく。

日頃からご飯を食べていても、今の子はほとんど、米がどのようにして出来るのかを知らない。実は最近では教師の方にも米作りの経験がなく、草取りの時など雑草なのか稲なのか見分けがつかず、教師も子供も一緒に悪戦苦闘することになるのだとか。

ゲームやテレビなどバーチャルな世界と違って、本物の生き物を育てるのはなかなか思い通りにはいかないもの。あまりにも便利な環境で育ってきた今の子供たちにとって、自然の中で農作物を育てることは驚くほどの手間がかかり、心底「大変だなあ」と感じながらも、実は同時に、新鮮な驚きと感動の連続でもあるようだ。

体験を通じて子供は、天候との関わりなど自然の厳しさと優しさ、農業の大変さと喜び、豊かな今の日本では忘れられがちな食糧の有り難さ、農と暮らしの関係、等々...沢山のことを学んでいく。田植え前の田んぼでのドロンコ遊びでは、道具もゲームも何もないのに、子供のこぼれんばかりの笑顔に、教師をはじめ関わった大人たちの方が驚かされたり考えさせられたり...

様々な立場の大人が関わり、みんなで見守りながら大切に大切に育てていく中で、子供は日本の主食である米を身近にとらえるようになり、観察学習でも、自分たちで育てている米なのでなおのこと興味津々、ひときわ真剣に取り組む。

最後の稲刈りでは、子供に全て任せる学校や保護者が応援に来る学校など様々だが、いずれにしても鎌を持つのは子供も大人もみな初めて！ 稲穂を胸いっぱい持ち上げて稲を刈る光景に活気がみなぎる。

最大のイベントは収穫した米を使った食べ物作り。子供たちで餅つきをしたりおにぎりを作ったり、みなでワイワイ食べて学習終了となる。

このような学習を経たあとの子供たちは、畑で作業している農家の人に子供の方から声をかけるようになったり、田畑にいたずらをするともなくなるといふ。米作りを通して、食べ物を大切にし、作ってくれる人に感謝し、田畑を大切にすることを学びとる。暮らしの足元をしっかりと見つめ、食べ物や食べることを大切に思えるようになるのである。少年少女の事件が起きるたびに「今の子に“命の大切さ”を理解させなければならない」というようなことがよくいわれるが、このような農の体験からこそ、そのことを理解する“心”の芯の部分が育まれるのではないだろうか。

食育は、生活の自立、心の自立、社会への自立、この3つの自立に向かおうとする意欲、すなわち“生きる力”を育むもの。学校、地域、行政、家庭、多くの大人たちの「元気に育てほしい」というひとつの気持ちのもとに、子供たちが学んでいくことにも大きな意義がある。この点、食育は一般の教科学習に比べちょっと手間のかかるものかもしれない。

何かにつけ効率優先の現代、子育ても食事も“手間”をかけるよりお金をかけて“効率”が優先されがち。そんな中で子供の“心”に異変が起きていると感じるのは私だけであろうか。このような大人たちの手間がけこそ、今の日本の子育てに求められているものではないだろうか。

地域の教育力が低下したといわれる。あるいは、食育は、新たな地域の教育力の再生にも繋がるパワーを秘めているのではないかと思う。この程「食育基本法」が成立し施行の運びとなった。食育の可能性におおいに期待し、日本の全国に“元気な食育の風”が力強く広がっていくことを願っている。

ほねぶとネット子どもの食と育を考える意見交流サイト主宰

<http://homepage2.nifty.com/shokuiku>

(食育コーディネーター 大村直己・おおむらなおみ)